

【国際交流基金事業 外国人学識者招聘 報告書】

文学部教授・石川日出志

2017年度明治大学国際交流基金事業外国人学識者招聘として、孫慰祖（Sun Weizu）先生を2017年6月12日から21日までの日程でお招きした。6月14日と18日に駿河台キャンパスで公開特別講義を実施し、さらに資料調査に同行して孫先生の研究手法を直に学ぶことができた。

石川は、2010年末以来、「漢委奴國王」金印の複眼的研究を進めている。当初は、この金印の真贋論争に考古学的手法で終止符を打つことが目的であったが、後漢代の製品であると断定できた現在では、中国の漢魏晋代歴代王朝が四夷の諸民族に与えた印のひとつとして総合的に研究する必要性を痛感するに至っている。中国における古璽印研究は長い研究史があるが、羅福頤氏によって1980年代に体系化された。しかし、1990年頃以来、孫慰祖先生によって多角的かつ詳細な研究が進められ、きわめて精緻なレベルに到達した。今後、「漢委奴國王」金印など中国古璽印研究を推進するには、孫先生の研究法を公開講義で学び、および実地に資料を観察しながらその研究法を学ぶのが必須である。そのため、昨年暮れに上海に孫先生を訪問して当方の研究状況をご説明し、それをもとに今回招聘したものである。

孫慰祖先生は、上海博物館青銅研究部に所属する中国古璽印・篆刻研究者である。年少の頃から書と篆刻を専門的に学び、篆刻作品は中国・全国篆刻芸術展などで何度も入選を果たした実績をもつ実作者である。そして、中国屈指の古璽印・封泥を所蔵する上海博物館の資料研究を基礎としながら中国の古璽印研究を30年来牽引されており、現在この分野の最高峰と評される研究者である。

孫先生の特別講義は、(1)「30年来の古璽印研究における新認識—曖昧から明晰へ、マクロからミクロへ、印の中から印の外へ—」(14日4限15:20-17:00/グローバルフロント1階多目的室)、(2)「秦漢南北朝璽印の断代研究」(18日14:00-16:00/L1011教室)と題して行われた。事前に孫先生には、中国古璽印研究の体系に関する講義と、古璽印研究の方法と成果の最先端に関する講義をお願いしており、2回の講義はその要請をはるかに越える充実した内容であった。

講義(1)では、①殷代銅印が従来未確定であったが、1990年代末から2000年代初めの出土資料で確定したこと、②秦代印と前漢初期の印の識別が90年代の秦南宮出土封泥群によって明確になったこと、③漢魏晋代印の識別が、各地の発掘資料の類型学的検討と印面文字の文献学的検討、さらには印鈕の変異を合わせることで精緻になったこと、④秦漢代の封泥については封泥の用法の変遷からも明確になったこと、⑤匈奴語・西夏語・パспа文字の印研究が近年大きく進んだことなどを具体的に解説し、さらに漢～唐代の印体制の周辺諸民族への波及の問題や、近年の封泥群の多量出土によって古璽印研究が急展開し

つつあることが語られた。

講義（２）では、古璽印断代研究の意義と研究史を解説したのち、①考古学的発掘資料と印面文字の文献学的検討の照合による断代標準の作成、②印面文字の風格（微細な特徴・くせ）と鈕形態の類型学的研究による断代構築の方法、③戦国代から南北朝期に至る製鋼技術の発展が印面を彫る鑿を規定することによる金工技術の展開をつかむ必要性、④封泥の文字研究と封検形態の変遷研究の実際、などを詳細にご紹介いただいた。

２回の公開特別講義では、東京大学・東京国立博物館・国立歴史民俗博物館・駒澤大学・専修大学・大東文化大学・大正大学・立正大学・新潟県立大学・檀原考古学研究所・福岡市教育委員会などに所属（元職を含む）される考古学・中国古代史・文字学・古璽印・書道・日本古代史など諸分野の専門研究者、東京芸術院・全日本華人書法家協会・全日本篆刻連盟・中国書法家協会など書道・篆刻界の要人、さらには考古学・中国史・書道・篆刻を学ぶ多数の方々のご参加を頂いた。孫先生のご講義を２回もじかに聴講できた喜びを石川に語る方もおられた。孫先生が明治大学の招請に応じたことに驚かれた方もあったが、石川の開会挨拶・趣旨説明を聞いて納得して下さったようである。また、後日、神保町のある篆刻・書道専門古書店に寄った折に、篆刻・書道界でこの講義を話題にされる方があるとも伺った。

招聘期間中、孫先生が岩手県立博物館の太田孝太郎中国古印コレクション、および東京大学考古学研究室・東京国立博物館所蔵の楽浪出土封泥を資料調査されるのに石川も同行して、孫先生の古璽印・封泥調査法をつぶさに観察することができ、また資料に関する議論を交わすことができた。このように今回の招聘で、孫先生の中国古璽印研究の方法と成果の骨格を学ぶことができたのは、中国古璽印研究の新参者としては例えようのない喜びであった。また、これまで交流のなかった諸分野の専門家との厚誼も得て、今後の古璽印研究の大きな支えになるとも感じた。

上記のように、公開特別講義はさまざまな分野からの参加を得たが、孫先生の充実した講義内容はそれぞれの方に深く刻み込まれ、日本における中国古璽印研究は厚みを増す契機となったと確信する。「漢委奴國王」金印研究についてはこの間、賛否両論議論しているが双方とも関係者が参加しており、今後の議論にも少なからざる影響をもたらすに違いない。今回の招聘の意義とその波及効果は計り知れないものがあると考ええる。

なお、公開特別講義の内容について、中国工商银行東京支店が発行する電子新聞・中文導報 6 月 24 日版に詳しく紹介された。